冬の女

横光利一

女が一人籬(まがき)を越してぼんやりと隣家の庭を眺めてゐる。庭には数輪の寒菊が地の上を這ひながら乱れてゐた。掃き寄せられた朽葉の下からは煙が空に昇つてゐる。

「何を考へていらつしやるんです。」と彼女に一言訊ねてみるが良い。

彼女は袖口を胸に重ねて、

「秋の歌。」

もし彼女がそのやうに答へたなら止(と)めねばならぬ。

静に彼女の手を曳いて、

「あなたは春の来るのを考へねばなりません。家へ帰

つてお茶でもお煎れになつてはどうですか。春の着物の御用意はいかゞです。湯のしん〳〵と沸き立つた銅壺の傍で縫物をして下さい。あなたの良人は間もなく手先を赤くして帰つて来るでせう。それまであなたは過ぎ去つた秋の物思ひに耽つてはいけません。秋には幸福がありません。さア家の中へ這入らうではありませんか。もし炭箱へ手を入れることがお嫌ひなら手袋を借しませう。水は冷めたくとも間もなく帰る良人の手先を考へておやりなさい。花々はまだ花屋の窓の中で凋んではをりません。暖炉の上の花瓶から埃りをとつて先づ一輪の水仙を差し給へ。縁の上では暖く日光

が猫を眠らせ、小犬は明るい自分の影に戯れてゐる筈です。だが、あなたはあの山茶花を見てはなりません。あの花はあれは淋しい。物置の影で黙然と咲きながら散つて行きます。あなたは快活に白い息をお吐きなさい。あの散り行く花弁に驚いて飛び立つ鳥のやうに。眼をくる〳〵むいて白い大根（だいこ）をかゝへて勝手元でお笑ひなさい。良人の持つて帰つた包からはあなたの新らしいショールが飛び出るでせう。しかし、春は間もなく来るのです。手水鉢の柄杓の周囲で蜜蜂の羽音が聞えます。村から街へ登る車の数が日増しに増して参ります。百舌は遠い国へ帰つて行き、枯枝からは芽が

生々と噴き出します。あなたは、愛人の手をとつて郊外を漫歩する二人の若い人達を見るでせう。そのときあなたは良人の手をとつて、『まア、春が来ましたわ。ね、ね。』と云ひ給へ。だが、あなたの良人のスプリングコートは黴の匂ひがしてゐてはいけません。」

底本：「定本横光利一全集　第二巻」河出書房新社
　　１９８１（昭和56）年８月31日初版発行
底本の親本：「改造」
　　１９２４（大正13）年12月１日発行、第６巻第12号
初出：「改造」
　　１９２４（大正13）年12月１日発行、第６巻第12号
※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、旧字、旧仮名の底本の表記を、新字旧仮名にあらためました。
※くの字点と踊り字「〻」は、底本のママとしました。
入力：高寺康仁

校正：松永正敏
ファイル作成：野口英司
２００１年12月11日公開
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

●表記について

・本文中の「〱」は、二倍の踊り字（「く」を縦に長くしたような形の繰り返し記号）。